



慶應義塾大学ビジネス・スクール

クラス発言の裏事情

5 助教授 春日正司の悩み

平成大学ビジネススクールの1年次1学期の必修科目であるマーケティング。今日もケースメソッドによるディスカッション授業が行われている。この科目でCクラスを教えている助教授の春日正司には悩みがあった。その悩みゆえに、教室に向かう彼の足取りは最近いつも重かった。このクラスには「できることなら指名したくない学生」がふたりいた。しかし、このふたりくらい熱心に手を挙げてくる学生もいないのである。彼(女)らを指名しないで授業を進めるとするのは、どう考えても不自然だった。

春日が指名するのをためらう学生は、そのひとりを岩淵浩太という。岩淵は30歳で、出身学部も平成大学の経済学部である。卒業後は外資系銀行に勤務したが、そこを退職して平成大学ビジネススクールに来た。彼はどんなケースでの議論にも強い興味を示し、指名されるといつも目をキラッとさせて嬉しそうな表情を見せた。マーケティングのクラスが始まった頃、春日から見るとこの学生はかなり優秀だと思えた。彼の発言には多面的な検討の跡が見られ、情報の統合度が高いレベルにあるように思われた。また、手を挙げるタイミングも、話の間の取り方も絶妙だった。

できれば指名したくないもうひとりの学生は、その名前を水野佳枝という。彼女は難関といわれる国立大学を卒業後、コンピューターメーカーの経営企画セクションで6年間働いた

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクール博士・修士課程併設科目「ケースメソッド教授法特論」の教材とするために、竹内伸一(ケースメソッド教育研究所)が作成した。(2004.10)

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ケースの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp)。また、ケースの注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html>。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ケースのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送は、これを禁ずる。